

第3回世界水フォーラムの概要

リバーフロント研究所長 横内 秀明

1. はじめに

2003年3月16日から23日までの8日間にわたって京都、滋賀、大阪の琵琶湖淀川流域において、第3回世界水フォーラムが開催された。フォーラムには、182ヶ国及び地域から海外参加者約6000人を含む約24000人が参加し、閣僚級国際会議には、170ヶ国と43国際機関から約100名の閣僚が、プレスからは、海外の270名を含む約1200人が参加した。そして700人を超えるボランティアと約180人の通訳のサポートがあった。さらに、同時に開催されたフェアには、約21万人の来場者があり、盛会のうちに幕を閉じた。

今回のフォーラムでは、適切な水供給や健康と衛生の改善といった人間が生活するのに必要な水と、食糧生産、交通、エネルギー、環境に必要なとされる水とのバランスを如何に取っていくかについて、38のテーマ、5つの地域に関わる351の分科会で議論が展開された。またほとんどの国において、より効率的なガバナンス、能力の向上、適切な資金調達が必要であることが確認された。

これまでの水フォーラムの経緯を含め、以下にその概要を述べる。

2. 水問題に関する世界の動き

1970年代以降、国際社会の環境問題に対する関心が高まり、1977年には、アルゼンチンのマルデル・プラタで初めての国連水会議が開催された。1987年には、「持続可能な開発」を提言したブルントラント報告書の中で、水問題が国際課題として取り上げられた。

その後、1992年1月にアイルランドのダブリンで水会議が開催され水と環境について広く議論された。さらに同年6月にブラジルのリオデジャネイロで開催された「地球サミット」において、淡水資源の確保が主張された。

しかしその後、頻発する干ばつや砂漠化、世界各地で発生する大洪水、水質の汚染など、水問題に対する国際社会の取り組みは不十分であるとの認識が、世界的に広がり、国連や各国政府を中心とした取り組みだけでなく、水に関するあらゆる分野の専門家、あらゆる関係者が共に活動できるような仕組みが求められるようになった。このような情勢の下、

次の2つの国際的組織が1996年に誕生した。

1) 世界水パートナーシップ (GWP)

世界銀行 (WB)、国連開発計画 (UNDP)、スウェーデン国際開発協力事業団 (Sida) が中心になって、①政府や既存のネットワークあるいは新たなネットワークを活用した統合的水資源管理計画の支援、②政府機関、援助機関に対する奨励、③情報、経験を共有するメカニズムの構築、④実質的な政策と適切な手法の提言、⑤利用可能な資源とニーズの適合の促進、を目的として設立された。現在、本部をストックホルムに置き、途上国における統合的な水資源管理の支援等を行っている。

2) 世界水会議 (WWC)

水関係の専門家によるシンクタンクの組織として、①重大な水問題についての特定を行うこと、②あらゆる意志決定レベルについての重大な水問題に関する認識を高めること、③統合的水管理に関する戦略ビジョンに到達するためのフォーラムを提供すること、④各種機関、意志決定者に対して助言と関連情報の提供を行うこと、⑤国境にまたがる水域に関する問題の解決に寄与する、ことを目的として設立された。現在、本部をマドリッドにおき、世界水フォーラムの開催、各種イベントへの参加、水に関する出版物の発行等を行っている。

3. 第1回世界水フォーラム

1997年モロッコのマラケシュで、政府、専門家、NGO、一般市民などあらゆる人々が一堂に介して、21世紀の国際社会における水問題の解決に向けた議論を深め、その重要性を広く世界にアピールすることを目的として、世界水会議 (WWC) によって提唱され、「世界水フォーラム」が開催された。

63ヶ国から約500人が参加して「マラケシュ宣言」が採択され、21世紀における世界の水と生命と環境に関するビジョンいわゆる「世界水ビジョン」を策定することが決定された。

4. 第2回世界水フォーラム

2000年オランダのハーグにおいて、156ヶ国から

約5700人が参加して開催された。ここでは、87の地域別および分野別の分科会が開かれ、世界の水の現状と25年後の姿並びに将来に我々がとるべき行動を、様々な面から検討した、「世界水ビジョン (Vision for World Water, Life and the Environment in the Twenty First Century)」が発表された。このビジョンの策定には、①電子メールを活用して世界中の15000人を越える人々が参加し、②2025年にどのような状況になるか示し、③世界の人々の意識が変わることを期待し、さらに、④水との直接関連性の薄い、生物、情報、エネルギー、制度等そして各地域を含め、幅広い議論を踏まえたものとなった。

また、世界水パートナーシップは、この「世界水ビジョン」を実現させるための「行動の枠組み (Framework for Action)」が、①水管理を効果的に、②水に関する知識の強化、③緊急の課題に取り組む、④将来のために開発を進める、を基本に示された。

一方、フォーラムと並行して、130ヶ国から114人の水関連大臣が参加した「閣僚級国際会議」が開催され、「21世紀における水の安全保障」を目標とした「ハーグ宣言」が採択された。

さらに、民間企業やNGO等による世界の水問題に対する取り組みを示す場として、開催された水に関する展示会「世界水フェア」には32500人が訪れた。

5. 第3回世界水フォーラム

1) 経緯

第2回水フォーラム後に行われた世界水会議理事会において、第3回は日本での開催が正式に決定した。これを受け、2000年7月には、「第3回世界水フォーラム準備事務局」が開設された。同11月には、関係省庁の水関連部局長で構成される関係省庁会議が設置され、開催地として、京都、滋賀、大阪が選ばれた。2001年1月には、橋本元内閣総理大臣を会長とする、各界の代表22名からなる運営委員会が設立された。同3月には政府として、第3回世界水フォーラムを支援し、併せて閣僚級国際会議を開催する旨の閣議了解がなされた。同5月には、皇太子殿下が名誉総裁に就任された。一方、国連は、2003年を「国際淡水年」に指定し、様々な活動に取り組むと共に、国連の水に関する23の機関は、水に関する世界の現状を明確にし、問題解決に役立てるべく「世界水アセスメント計画 (World Water Assessment Program)」を実施している。

2) 第3回世界水フォーラムの特徴

- ① 第2回世界水フォーラムで生まれた電子メールをさらに発展させ、インターネット上の会議、すなわちバーチャルフォーラムにより、世界中の人々が水問題に対する関心と懸念を共有することを可能にした。また、水の声プロジェクトは、これまでほとんどその声を発する場を持ってこなかった草の根の人々の声を、フォーラムでの議論へ結びつけることが可能となった。さらに、水コンテスト、水の声大賞を設けるなどして、活動を側面支援した。
- ② フォーラムへの参加者代表と閣僚が、個人の立場で対話をすることによって、参加者からのメッセージを直接受け取り、同時にフォーラム参加者に直接訴えることで、お互いの意識向上や行動に影響を与え、人々が水問題に取り組んでいくきっかけとする。
- ③ 参加者が自らの活動内容を発表する場として会館内に「参加者センター」を設け、情報の発信、共有、議論を行った。
- ④ 水と生きる、水で生きる、水と結ぶを合い言葉に、水に関するフェア・フェスティバルを、琵琶湖淀川流域の各地で開催し、さらに大阪では世界や国内の水問題に理解を深めるための水のエキスポを開催した。

6. おわりに

第3回世界水フォーラムは、「議論から行動へ」を目標に市民、政府、水の専門家、NPOなどあらゆる階層の人々があらゆる地域から集まり、8日間の議論を終えた。

この中で、世界規模の水問題に挑戦し、2000年の国連ミレニアムサミットでの目標である、2015年までに安全な水と衛生施設を持たない人々の割合を半減させるための支援プログラムを創設する。

また、北北間および南北間の交流促進の為にネットワークを設立する。等、多くの具体的な提案がそれぞれの関係者によって、議論の成果として出された。

これら多くの議論の成果は、今後、より具体的な水の行動計画書として整理され、6月にフランスで開かれるG8の会議で議論されるよう準備が進められることになる。

また、第4回世界水フォーラムの開催国については、現在決定されていないが、今年中に開かれる世界水会議の理事会で決定されるであろう。